

第 51 回埼玉文芸賞（贈呈式部門別選評）

【小説・戯曲部門】

今回は残念ながら埼玉文芸賞がなく、準賞二作と佳作二作の授賞となった。

準賞の「いのちの足跡」は、家族三代の物語。病気による、母親の足の切断の話だが、暗く重い話ではなく、淡々と綴って好感が持てる。文章もしっかりしているが、ただし、余計な文言や形容が多々あり、その辺を整理すれば、すっきりとした作品となる。……父が上京し、居酒屋で「僕」と、母の病気について話し合う……。

もう一作の準賞「閉ざされた宗谷海峡」は、若い女性である「私」の一人称で語られる。だが筆者は高齢の男性。言葉づかいや内容にやや無理がある。「私」は、昭和十七年五月、夫の仕事先である樺太に嫁いだ。そこで、人一倍きびしい姑に仕えなければならなかった。私は、その樺太で男子と女子の母となる。しかし幸せは続かず、昭和二十年八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾、敗戦国となり、樺太にソ連兵がやって来た。彼らは、機銃掃射や爆撃で何百人もの市民を殺し、さらに略奪の限りを尽くす。やがて私たちはソ連に抑留される。……抑留生活や引き揚げの様子はよく書けているが、余計な文章が多い。

佳作の「山の保養所」は、四十五歳でリストラされた白石透という中年の男性が主人公。彼は田舎に引っ越して、農業で自活することになる。売りに出された健保の山の保養所を白石は安く買い、そこで農業を営んで暮らすことにしたのだ。……平易で読みやすく、内容も悪くないが、最後がバタバタと終わってしまった。

「高島秋帆——水清らかに方円の器に随う」は、岡部藩に預けられた高島秋帆を淡々と描いた好編。多少の手入れは必要だが、よく書けている。しかし高島秋帆は、よく知られた歴史上の人物。これまでいろいろと書かれており、僅か五十数枚で彼の思想と行動を書き切るには無理がある。江戸送りとなった後、何だか、あっけなく終わってしまった。

（高橋 千劔破）

【文芸評論・エッセイ・伝記部門】

準賞 2 作品を選ぶことができた。

井上敬三「上官に 3 度答弁「日本は負ける」」は伝記部門に応募した自伝的な 100 枚の力作。満州の陸軍体験およびシベリア抑留体験の詳細な記憶とその再現力に目を見張った。たとえば詩人の石原吉郎はシベリア抑留体験を語るのに帰還後 10 年を要したが、本作の作者は 90 歳を越えて「体験を後世に伝えたい」思いで語った。昭和 19 年の応召前に大手軍需工場の社員として軍用機、戦車、軍艦、輸送船、石油備蓄量など戦備の不足を知悉し、入営後それを上官から問われるままに数値入りで説明して、戦争の長期継続が困難な「日本は負

ける」という認識を語りながら「営倉入り」を回避できた。幹部兵候補として戦死覚悟の入隊を宣言したのである。上官の陸軍中尉が、日米開戦を期に内閣情報局が命名した「大東亜戦争」ではなく「太平洋戦争」という（海軍寄りの）呼称を用いたところが気になった。作者は、あるいは無意識のうちに敗戦後占領期以降の呼称や考え方に従っているのだろうか。

武内和子「学園紛争、もう一つの闘い」は「大学闘争」ではなく「学園紛争」という認識のもとに、地方出身でアナウンサー志望の女子学生の「私」が四年生となった1968年、ひたすら就活に努めてそれを実現し、夢中で生きた半世紀を振り返って、「私」は「自分自身と闘い続けた」のだと総括するに至る。「紛争」ならぬ「闘争」のオブセッション。この世代にとって不可避な人生の問いである。今の学生はどんな「闘争」をしているだろうか。

佳作としてエッセイ五編。山ノ井一「痲癩老人日乗」は猫、弟、自身の病の三題噺で表題はともかく手練れの文章。池田真奈「おきあがりこぼし」は若い「私」の自己再生の話。松本誠司「加藤楸邨と私」は最晩年の楸邨と「私」。溝江奈都江「何事も終わってみればそれまでのこと」は遺訓となった亡父の言葉。中野多鶴「アネモネの花に寄せて」は亡母の実家の祖母の記憶。準賞も佳作も内容にふさわしい文章で書かれたゆえに長さも適切な作品に仕上がっていた。

(佐藤 健一)

【児童文学部門】

今年度の応募は27編。残念ながら埼玉文芸賞は選出できず、準賞二作と奨励賞を選んだ。

選考にあたっては、子どもの心に寄り添っているか、大人の価値観や思い出話のみを押し付けていないか、などを重視した。

準賞1は、増子敏則さん「約束の橋」。森を分断する深い崖にかかる橋。そこには、ある大ヘビの生きた証があり……。設定がおもしろく、大ヘビの語りも軽快で引き込まれる。が、終盤にあっけなさが残る。大ヘビを助けようとする者は皆無だったのか？

準賞2は、石垣京子さん「ねこに、ゆうき」。母ねこに育児放棄された子ねこの成長物語。「おじちゃん」やヘビの「ぬし」、先輩ねこなど、キャラクターが生き生きとして暖かい。

奨励賞は小堀瑠菜さん「月の民」。壮大なSFファンタジー。主人公を際立たせると、もっと読みやすくなるだろう。

佳作1は諸口正太さん「時間の道」。「旅行中の神様」が発する光を見たせいでタイムスリップ、時間の道を辿らされる二人の少年。この魅力的な設定をもっと楽しく生かし、教育的な狙いを遠ざけてほしかった。

佳作2、八女みどりさん「鳥になったよ!」。ファンタジーの入口と出口が自然で心地よい。冒頭の、顔の造作を友人とのしり合うシーンは物語にそぐわず、違和感が残る。

佳作3、浅田加代子さん「グングンの森」。ベジタリアンのキツネと森の小動物たちという

設定はおもしろいが、「あらしのよるに」を思い出させ損をしているという意見が出た。

佳作4、蒔悦子さん「ブルースカイボックス」。死んだ昆虫を使つての工作、そしておばあちゃんの死。その取り合わせがいい。出だしがもたつき状況が分かりにくいのが残念。

佳作5、井上朝之さん「少女剣士、風を呼ぶ」。剣道部の少女の青春物語。祖父が孫に語る形式であり、読みやすく工夫されている。

第6席、木下泉さん「緑の森公園の秘密」。とぼけた味わいが楽しい泥棒物語。

終わりに。受賞のお二人、そして佳作の方々、次回もぜひ応募してください。来年、贈呈式でお目にかかりましょう。

(金治 直美)

【詩部門】

詩部門の応募数は37点で単行本5点と原稿作品32点であった。このうち上野芳久『風の道』と水木萌子『かぎろい』と葉山美玖『約束』の単行本詩集三冊が最終的な候補となり、さらに検討が行われた結果、次の二冊が、埼玉文芸賞準賞に決定した。

上野芳久『風の道』は詩の歩行ともいえる緻密な詩行であり思考力によって構成され持続することにより思考を深める要素になっている。説明的になるのをおそれずに重ねていく詩法は多層的な構成になっているが詩の言語に昇華する難しさをも含まれている。

水木萌子『かぎろい』は優しい眼差しの感じられる詩であり現実感をふまえた説得力がある。他者に対する慈しみの言葉が心にひびくのである。

二詩集の力量の確かさは伝わってくるのではあるが詩的想像力の独自性を言葉で表現することに配慮することも大事なのである。

奨励賞は蜻蛉泪「窓外」である。十代からの応募は一作品のみであったが、若い感性がよく表出されて希求感がみられることで、意志の主張となり詩の成立となるのである。

このほか佳作に六作品が選ばれた。

葉山美玖『約束』は自身の深層に分け入り存在の発端を見極める視線が自然体で描写されており明るみをも表出されている。

塩田禎子『はるかなジョムソン街道』は強い願望に導かれた求心的な詩である。

那須野明「枇杷の木」は昆虫達や植物への観察眼が描写を生々とし優しさを表出する。

津山こういち「ここ」は発想の着眼点の面白さがあり独自性の強度の詩になっている。

佐久間利洋「亀の甲羅に流れ星」希求的な心情を物語り日常と非日常を交叉させている。

宇田川直孝「夏の記憶」は懐しい風景を丁寧に通ると現実の社会に私がいるのである。

このように原稿作品のなかに多くの秀作があったことが収穫であるといえた。

(鈴木 東海子)

【短歌部門】

今年度の文芸賞は、短歌の部門にあって、準賞二冊を、選ぶことになった。

生沼義朗氏の歌集『空間』と渡辺栄治氏の歌集『位相』である。

選考委員三人のそれぞれの意見のあるところだが、妥当な選定であって、この時代をひたむきに、生きるさまが、短歌の作品として、二冊共に、一つの世界を、確かな世界のものとしているのであろうか。

初めに、生沼義朗氏の歌集『空間』について、感想を書く。

医師は医師と看護師は看護師と事務職は事務職ばかりと会話しており

歌集の初めの頃、このような一首がある。提示しただけの表現が、ここにあって、いきている生沼氏の生とその空間の反応を、受け止めることが、出来る。そこを評価したい。

おおかたは中間色に塗られたるモノばかりなりなかんづくグレイ

このような歌もあった。ここにも、作者一人の個をみることができる。

これから、生沼氏に求めるとしたら、事柄より、抒情に及ぶところだろう。

渡辺栄治氏の歌集『位相』について、作者は、日々、顕微鏡を覗いているようである。微生物に日々むきあっているのが、仕事なのだ。その世界を丁寧に几帳面に、切り取って、作品として示している。その生は、そこから生活に及ぶ世界である。誠実なためか、常識的なものがあるが、

ブラインドの縞の光を横たへて実験台は朝に人待つ

目に見えぬ大きさをもつ細菌を兵器に利用せしは人間

このような作品に、その生の特徴と、特異なものを、見ることができる。生きての記録として、一人の意味を超えて、ここに狭いけれども、一つ的生活空間があり、その作品の価値を認めたい。ここには、現在と時代の光と影を見ることでもある。

(大河原 惇行)

【俳句部門】

今年度の応募数は八十三編。この中の半数近くが七十代でした。七十代が多いというのは俳句の分野だけではなく、全体的な傾向のように思えます。

今年度の俳句部門では埼玉文芸賞はありませんでしたが、僅差の作品で二編の準賞を選びました。一人は山崎十生氏の句集『未知の国』。山崎氏は社会への視野、ことに震災に目を向けて作品を作り続けている俳人で、非常に意欲的な取り組み方をしています。こうした作家はともすると、物を言うことに集中して詩情がおろそかになるのですが、今回の句集『未知の国』では、そうした主張しようとするものを抑えて、特異な詩情を作り上げたと思います。

決着のつくまで霞むことにする

まづ己信じて青き踏みかけり

鍵のない空につぎつぎ桜の芽
手を振るはなぜか憲法記念の日
ゐない人にも新茶淹れ供えけり
いずれも詩への昇華が見事です。

次の一人は粉川伊賀氏の句集『一庵』です。この作品は、先の山崎氏とは対照的に自然を真っ正面に見据えた作品群が並んでいます。

妻子あり初孫のあり雑煮あり
啓蟄や駆け出しさうな芭蕉像
もう一度野に出て仰ぐ今日の月
空蟬は虚空にしがみつくごとし
セーターに包み込まれる安堵かな

これらの作品は日常の中の所感を詩に昇華させているものです。一句目の家族への賛歌、二句目の季節の推移の捉え方、三句目の季節への執着、四句目の自然へのまなざし、五句目の体感覚で捉えた作り方、五感を全開した作り手であるところが評価されました。

ほかに、佳作として若杉朋哉句集『朋哉句集二』、山口素基句集『花筐』、石井一枝句集『雪催』、河邊幸行子句集『お百度ごころ』、倉持梨恵句集『水になるまで』、それに次ぐ唯一の五十句の原稿の田中美佐子氏の「通り雨」が選ばれました。

(岩淵 喜代子)

【川柳部門】

今年の応募者は35名（男性24名、女性11名）でした。選考結果は埼玉文芸賞該当なし、準賞2名、佳作6名でした。今回は準賞と佳作との差がそれほどありませんでしたので、得票数の合計で決定しました。

準賞1に選ばれた田村恵滋さんは、選考委員全員から得票を得ました。作品は「名月を転がしながら手酌酒」「すき焼きの機嫌うかがう吟醸酒」など7句が酒の句でした。とにかく酒が好きで好きでしようがないと言っているようにも見えます。一方で、健康にも気をつかい「徘徊の気配を隠す早歩き」「近道に怪訝な顔の万歩計」などを詠んでいる。また「取り柄なく大病なしで古稀を超え」と前向きな姿も見せている。

準賞2の矢澤俊美さんは、タイトルそのままに法廷の作品が大半である。特に目に止まったのは「法服の鞆の中は白と黒」「原告の挙げた拳がよく吠える」「遺産分け天秤棒がよく騒ぐ」「判決の一語一語をかみ締める」原告と被告との戦い、それを取り巻く傍観者の心理などを巧みに描いた。「AIが人をも裁く近未来」人工知能AIが人間を裁く時代が来ると予測している。

佳作1の岡田孝道さんは、手慣れた手法でそつなくまとめている。「定年の私を妻が独り占

め」「美しく生きる心の窓を拭く」少しこそばゆい気がしないでもない。

佳作2の佐藤京子さん、明るいタッチで若さを表現している。「風と行くガイドブックは持たぬ旅」「道草をとがめる妻の千里眼」など。

佳作3小野嗣朗さんの作品「理想から離れ自由な日を送る」「細かくて経理担当命ぜられ」現役時代を思い出して作ったように思われる。郷愁を誘う句である。

佳作4市村禎雲さん、ことばの組み合わせを心得ている作者なので、川柳が楽しくてしかたないようだ。「シャボン玉ひとつは母に逢いにゆく」「悩む自由たっぷりあって爪を切る」言い得ている。

佳作5塚田健次さん、柳歴は浅いが、川柳感が良い。「私には過ぎた妻だと思えます」「五月晴れ息子に嫁がやっと来た」

佳作6閑野道子さん、「検査服着て俎板の鯉になる」「負の連鎖続かぬように鶴を折る」川柳の奥深さを学ぶことによってさらに句に重みが出てくることを期待したい。

(酒井 青二)